

<辛口時評>

公園で考えたこと

早春の陽がそそぎ梅の香が漂っていた。公園のベンチで、そぞろ行き交う人びとを眺めながら、私はある感慨に浸っていた。今から20年余り前、欧州を旅した際、街角で、公園で、レストランで、老人たちの姿とくにカップルの姿を数多く見て強い印象を受け、社会の成熟とはこういうことか、福祉先進国とは老人が社会に居場所を得て、街の風景に溶け込んでいる社会なのだと妙に感心したことがある。日本がこうなるのはいつのことだろうかと、ロンドンの公園のベンチで腕組みしながら考え込んでしまった。

ところが、いま目の前を行き交う人びとを眺めていると、ほぼ半数が中高年で占められ、高齢者のカップルも目立っている。中には80歳を超えたと思える男性が伴りよを車イスに乗せていく光景も見られる。

30年前の日本では、中高年が夫婦連れで外出するのは冠婚葬祭の時ぐらい、それ以外に2人で外出するときは世間体をはばかりの雰囲気さえあった。当時、幅をきかせていたのは若いアベックと若い親子連れで、どこの盛り場、遊び場でも若者と子連れのカップルでにぎわっていた。都会には老人はいないのかとさえ思えるほど、街に老人の姿は少なかった。

それがここ20年余りで大きく変わった。デパートやスーパーの郊外展開もあって、中高年カップルが車で連れ立って買い物する姿が日常化した。車の使えぬ高齢者は地元商店街の大切なお客だ。最近映画館、美術館、公園、レストラン、観先地など人の集まるところに中高年の姿がめっきり多くなった。

老人たち(私もその一人だが)をこんなに多く街で見かけるようになったのは、少子・高齢化が一段と進んだこと、核家族が高齢化し、老人世帯が増えたことを示すと同時に、医療の進歩もあって健康な老人が増えたこと、年金生活者が増えたこと、駅のエスカレーターはじめバリアフリーの街づくりが進んだこと、バスの無料パス、映画館、美術館の割引など、高齢者を街に出やすくする福祉の充実が大きくあずかっている。このことが長期不況下でも社会を比較的落ち着いた安定装置になっているのかもしれない。「失われた10年」で日本は多くのものを失ったが、半面では社会の「成熟の10年」でもあったように思える。

しかし、成熟は衰退への分岐点にもなる。事実、経済の低迷だけでなく、社会の随所に衰退の兆しが見える。それは「豊かさのパラドックス」でもある。「生活の質」を高める福祉の日常化(ノーマライゼーション)などは「豊かさ」の本来の消費目的にかなっていないが、社会に広がる退化現象

一勤勉性、忍耐力、倫理観、企業家精神の衰弱、夢のない時代閉塞(へいそく)感、引きこもりやパラサイトシングルの増加などは「豊かさ」が生んだ社会活力の低下であり、衰退の兆候に思える。何のための「豊かさ」だったのかとの思いが募る。

風が冷たくなり、公園を去ろうとして目にしたのは、隅の方に並ぶ青いテントの列であった。この寒空の下に、リストラなどで「豊かな社会」を追われた「難民」たちがひっそりと生きている。家族はいるのか。病気をしたらどうするのか。「豊かさ」を浪費して社会の衰退を招くのではなく、「活力ある成熟社会」にどうつなぐのか、生易しい課題ではないとも思い知らされた。

ついでに言えば、帰り道にきれいな並木道ができていたが、せつかくの街の景観を壊しているのが電線、電柱の「クモの巣」である。これも20年前の話だが、当時の知事の名代で初めて独・バーデンビュルテンベルク州を訪問し、州内各地を視察した際、小さな町まで電線・電柱がなく、街並みがすっきりしているのに感心したことがある。

翌年、州政府の代表が神奈川県を訪問されたが、横浜を案内しているとき「同じ敗戦国なのに、ドイツの街には『クモの巣』がなく、ドイツより豊かな日本が大都市でさえ『クモの巣』だらけなのはなぜか」と問われ、説明に苦勞したことがある。食事の席まで話が尾を引き、一人が次のように言ったのを今も覚えている。「GDPは日本の方が上だが、生活の質はドイツの方が高い。都市景観は市民の共有財産であり、事業者がこれを壊すことは許されない。『クモの巣』は日本が生産者優位の社会であることを象徴している」。

あれから20年、『クモの巣』退治はいぜん遅々たる歩みである。